巻頭言

なぜここにいるのか

立教大学チャプレン　金　大原

卒業を迎える児童、生徒、学生の皆さんにお祝いとともに、神の祝福が豊かに注がれますようお祈りします。卒業は「人生の節目」であると思います。竹が10メートル以上伸びることができるのは節があるからです。同じように、私たちの人生が高いところに向けて跳躍するためには、陳腐になりやすい人生をまとめてくれる「節目」が必要なのです。そういう面で卒業というのは大事な切り目であり節目であると思うのです。

「三度目にイエスは言われた。『ヨハネの子シモン、私を愛しているか。』ペトロは、イエスが三度目も、『私を愛しているか』と言われたので、悲しくなった。『主よ、あなたは何もかもご存じです。私があなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。』イエスは言われた。『私の羊を飼いなさい。』」（ヨハネによる福音書 21:17）

師匠の愛し方

聖書のこの部分は「ティベリアス湖畔の卒業式」と言っても過言ではありません。イエスとペトロの関係はご存じと思います。新しい世界への夢を抱いていたのに、師匠が十字架の上で亡くなられ、気がくじけて故郷のティベリアス湖畔に戻って網を打っている弟子たちのところを、イエスが訪れた理由は何でしょう。イエスの道を離れてしまったけれども、一時はイエス運動に参加していたことを記した終了証を授与するためだったのでしょうか。それとも彼らの弱さを咎めるためだったのでしょうか。そうではないなら、もう一度始めてみようと説得したかったのでしょうか。違います。イエスは弱くて信仰の薄い者ではあるけれども、彼らをまだ弟子と思っておられます。師匠はいつまでも師匠です。師匠の死によって衝撃を受け、絶望の淵にある彼らに根源的な希望を再びもたらせ、神への信頼と愛を回復させるために訪れたわけです。網を打っていた漁師たちに「私に付いて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われたのが最初の呼びかけだったとすれば、今ティベリアス湖畔で、イエスは2回目に弟子たちを呼んでいます。弟子たちはまだ未熟です。でも、イエスは彼らに後事を託されているのです。これがまさに師匠の愛です。愛というのは「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」（Ⅰコリ 13:7）ものだからです。

英語で卒業に当たる「commencement」には「始まり、出発」という意味もあります。弟子たちはイエスの学校を卒業することになりました。これ以上学ぶことがないからではありません。これからは師匠のいないところで師匠に教わったことを実現していかねばなりません。彼らは新しいスタートラインに立っているのです。

イエスとペトロの問答です。「あなたはわたしを愛しているか」、「はい、主よ、私があなたを愛していることは、あなたがご存じです」、「私の小羊を飼いなさい。」

この会話が3回も繰り返されます。これは、イエスが死刑にされる前に、イエスを3度も「知らない」と否定したペトロを赦す過程であります。3度も、乱れもつれた糸を解きほぐすことだと理解すれば良いでしょう。イエスを3度も否定した時、それはペトロの本音だったのでしょうか。彼は恐れて深くまで考える余裕がなかったのです。いったん恐れの波が理性的な判断の堤を超えてしまえば、その次は混沌です。ペトロはただ自分を守る

ためにイエスを否定しました。しかし、今ペトロはイエスの前でイエスについての本当の思いを示さなければなりません。

ペトロにとって何かを強いられる雰囲気ではありません。嘘をついて免れるべき状況でもありません。イエスはペトロの心の中でちらちらするご自分への信頼を立ち上がらせるため繰り返して質問をされました。「私を愛しているか」という質問はペトロの弱さと恥、そして自責の念を突っ切って眠っていた愛を起こしました。ペトロは心を込めて「私があなたを愛していることを、あなたが知っている」と答えます。同じ問答が３度も繰り返され、ペトロの心の深いところからイエスに対する愛と信頼が回復されます。このようなペトロにイエスは「私の小羊を飼いなさい」と言われます。

イエスはペトロを咎めませんでした。ペトロも言い訳はしませんでした。ただ互いへの愛を再確認しただけです。それだけです。愛すれば赦すことができ、赦せば信頼でき、信頼すれば自分のミッションをも頼むことができるのです。

自分はなぜ今ここにいるのか

ティベリアス湖畔、ここは失われた愛が回復される空間でした。皆さんは今どこにいるのでしょうか。

アメリカの原住民は自分を知るために３つの質問をするそうです。

1）自分は何者か（人生の本質を問う）
2）自分はどんな者になっているのか（現存在分析）
3）自分はなぜここにいるのか（実存の把握）

私たちは自分の立ち位置と自分を同一視する場合が多いです。しかし、根本的には自分の職業や役目よりどんな人なのかが重要でしょう。また、人生の道に迷わないためには自分は今どうなっているかを問い続けなければなりません。夢見る姿と現実の姿が一致しているかを見つめながら、その一致のために常に目を覚ましていなければなりません。何よりも重要なのは「自分はなぜここにいるのか」です。私たちに与えられた時間は現在だけです。過去はすでに過ぎ去り、未来はまだ来ていません。もちろん現在の中には過去と未来が記憶（memory）と期待（anticipation）の形で混ざっています。だからもっと今ここが美しくない限り、その人生が美しくなるわけがありません。

人ごみの中でも、ふと「自分はなぜここにいるの」と思う時があります。雰囲気に引き込まれず周りとの乖離を感じるとそのような思いはもっと強くなります。キリスト教は、人は他人を豊かにするために存在すると思っています。周りの人々を豊かにし、幸せにするために人ごみの中にいるということです。世のすべての人は愛されたい症候群を持っています。そのような人々の中に自分がいる理由は明らかでしょう。私たちはお互いに愛し合うために、平和をもたらすために今ここにいるのです。昔、ウィリアムズ主教は日本の若者にこの簡単な真実を悟らせるために立教を建てたわけです。

ティベリアス湖畔は、ペトロが自分は何者で、今どこにいるのかを自覚する場所でした。自分のすべきことをあらためて自覚する場所でもありました。もちろん彼がそのようなことに気づいたのは師匠であるイエスが彼のところに訪ねて来られたからです。皆さんは今どこにいるでしょうか。どんな人に会っているでしょうか。

使える知識にこだわらないでください。自分は何者かを問い続け、夢を果たすため努力すべきです。そして、どこでも愛が花咲くところにして過ごしてください。ティベリアス湖畔にイエスが現れると、絶望が希望に変わったように、皆さんのいるところにイエスが共にいてくださることを信じ、皆さんがそこにいる理由を心に刻み付けて忘れないでください。神の愛と恵みが皆さんと共にありますように。